

「世界の諸地域」指導の秘訣

前全国中学校社会科教育研究会会長 赤坂寅夫

その一 世界地誌を学習するねらい

トラの巻①に続き、今回は世界地誌の学習について説明しましょう。

まず、中学校においてなぜ世界地誌を学習するのか。それは歴史学習において、日本の歴史を世界史を背景として理解することが重要であると同様に、私たちの生活とそれを取り巻く自然は地球上に起きる自然現象の一部であり、ほかの国や地域の人々と結びついた生活であり地球及び世界の一部であるわが国の国土認識としての見方・考え方が必要だからです。

小学校では、下の表1のように3学年で学校周辺および市町村規模の地域、4年では都道府県規模の地域、5年で全国規模の地域学習と同心円的に拡大します。そして6学年の最後の「我が国と結びつきの強い国々」の学習で世界の学習になりますが、アメリカ合衆国や韓国、ブラジルなど数か国について、わが国との貿易や文化・スポーツの交流など中学校に比べ、限られた内容となって

います。

世界全体・地球全体の自然や生活・文化、六つの州の地誌を学習するのは、生徒にとって初めてであり、生徒のその後の進路によっては最後となるかもしれませんが、国民の基礎的教養を培う学習として重要なのです。



ポイント

わが国の義務教育における世界地誌学習は、中学校が最初で最後。国民的教養の基礎・基盤

その二 世界地誌学習を「主題学習」

としたのはなぜか

前回のトラの巻では、地理の学習には系統地理学習と地誌学習の二つがあり、中学校では地誌学習が通例であることを述べました。昭和43年版・53年版学習指導要領では、各州に時間をかけて自然・歴史・文化・宗教・資源・産業・交通・結び

表1【小学校社会科における地理的内容項目】 ●地理的な内容

第3学年・第4学年

- 学校周辺の特徴
- 区市町村の地域的特色
- 働く人 ・ 店で働く人
・ 農家の仕事
- 暮らしの変化
・ 古い道具と昔の暮らし
・ 受け継がれる地域の行事
- 暮らしを守る ・ 火事から守る
・ 事故や事件から守る
- 住みよい暮らし ・ 水の確保
・ ごみ処理
- 地域の発展に尽くした先人
- 都道府県の地域的特色

第5学年

- 私たちの国土
・ 地形と気候の特徴と暮らし
- 私たちの生活と食料生産
- 私たちの生活と工業生産
- 情報化した社会
- 私たちの生活と環境

第6学年

- 日本の歴史
- 私たちの生活と政治
- 世界の中の日本
・ 日本とつながりの強い国々

混合農業

▼④さまざまな作物をつくる農業地域(ドイツ)
ドイツやフランスなどでは、小麦・ライ麦などの麦類やジャガイモなどのいも類、てんさいなどの根菜類、家畜の飼料となる牧草などの栽培と、牛や豚などの家畜の飼育を組み合わせた混合農業が行われている。区画整理された農地では、土地の栄養を保つために2～3年ごとに別の作物を栽培している。



『アドバンス 中学地理資料』 p.66

つきなどの観点から丁寧な地誌学習が行われました。しかし、知識詰め込みの、どの州も同じ学習パターンの繰り返しが行われたことが課題でした。

そこで今次改訂の学習指導要領では、世界の諸地域の学習を「主題学習」、日本の諸地域の学習を「中核的考察による学習」とし、各州及び各地方に注目する際の視点を変えてメリハリのある学習展開にするようにしたのです。

その三 各州の学習をどう展開するか

…「ヨーロッパ州」を例に

州の学習は、「自然・歴史・文化・産業など、州の大観の学習」→「主題による追究学習」の展開となっています。

まず、各州の導入では、「第1章2節 世界のおもな国」での学習の復習・応用として、地図帳を活用して、主要な国の名称と位置、国旗の学習をすることが必要です。

(1)「大観の学習」

「大観の学習」では、基礎的、基本的知識・概念・技能の獲得が中心とされています。そのためには、**①基礎的、基本的知識・概念・技能の獲得とその意味を理解する。**

例えば、

・「1 ヨーロッパの自然」では『社会科 中学生の地理』（以下、教科書）p.58に載っている「ユーラシア大陸、アルプス山脈、ライン川・ドナウ川、スカンディナ비아半島、大西洋、北海、地中海」の地名を教科書や地図帳で位置や範囲を確認し、**地名と位置の一致を図る学習**をする。

・「国際河川、氷河、偏西風、北大西洋海流、西岸海洋性気候、地中海性気候、亜寒帯気候」の地理用語の意味を理解させる。

・単に口頭で説明するのではなく、地図、雨温図、写真を活用し、その読み取りやそれぞれの資料との関連を引き出す作業等を入れながら思考させ、**地理的事象の意味と地理用語の概念を理解させる。**

例えば、ヨーロッパの農業のキーワードである「混合農業」、「酪農」、「地中海式農業」については、『アドバンス 中学地理資料』 p.66～67の写真や統計・グラフを活用して、実際の農地や農業生産の

ようす、農産物の主要生産国を読み取らせることにより、ヨーロッパの農業がもつ三つの形態と、地域の具体的な姿を理解させたい。また、『帝国書院 地理シリーズ 世界の国々3 ヨーロッパ州 ①』 p.16～17などを活用して、三圃式農業から発展したヨーロッパの農業の歴史を理解することが、先生方自身の教材研究として大切です。

さらに、東京の雨温図や四季の写真、緯度との比較など、目に見えて体感している事象との比較を示すとより理解が深まると考えます。教科書の本文に載っている用語を身につけることが基本ですが、生徒の実態を測りながら単元末の小テストや授業前の確認テスト等の工夫を行い、確実な定着を図ることも必要です。

②文化や産業の学習では、地理的見方・考え方の基礎を養う。

「2 ヨーロッパの文化と歩み」教科書p.60～61の学習では、キリスト教をベースとして教会の写真や言語の比較から三つの民族に大別できることや、「植民地」をつくって世界各地に進出していったことから「欧州連合（EU）」へのつながりを、What（何が）、How（どのように）、Why（なぜ）、When（いつから）、Where（どこ）の視点から見ると、考える学習を展開します。

例えば、キリスト教の宗派と言語の分布図から何が、どのように、どこに分布しているかを読み取ることで三つの民族に大別できる見方や、多様な民族や文化をもつヨーロッパがなぜ統合したのかを考える学習です。

「3 ヨーロッパの産業」の学習では、地中海

式農業、混合農業、酪農が上記の四つの視点から自然条件とどう関わり、どのような食文化を形成しているかについて、地図、写真、具体物を示しながら見方・考え方を培います。



ポイント

「大観の学習」では、基礎的、基本的知識・概念・技能の獲得を丁寧に行うこと

(2) 「欧州連合 (EU)」を主題とした追究学習

ここでの学習が世界の諸地域の学習の核となる部分で、これまで獲得した知識・概念・技能を活用して思考力・判断力・表現力を育成する学習活動を展開しなければなりません。

「2 ヨーロッパの文化と歩み」では多様な文化と民族がEU (欧州連合) に統合した理由と歴史を、「3 ヨーロッパの産業」では農工業や産物の地域による違いを学習しました。宗教や言語、文化・伝統の違いを克服して統合した利点は、違いをきちんと把握したうえで理解することができます。「なぜ統合したのか」、「統合したことによる利点は何か」、「統合したことによる変化と課題は何か」を、これまで学習した内容と地理的見方・考え方をふまえ、新たな資料 (地図、統計・グラフ、文章) から読み取ったことをもとに考え、自分の言葉で表現する活動です。

(3) 思考力・判断力・表現力を育成する

言語活動の工夫

世界の諸地域の学習において、ぜひ実行してほしい学習活動があります。今次改訂の学習指導要領では思考力・判断力・表現力を育成する言語活動の充実が求められています。そこで、世界の諸地域のいずれかの州学習において、地理的分野における言語活動の基礎・基本を養ってください。例えば、「ヨーロッパ州におけるEUの利点と課題」、「アフリカ州における産業の発展と日本との関わり」、「南アメリカ州における環境問題と持続可能な開発」など、社会参画の視点から今後の課題と対策を、地理的見方・考え方を養いながら追究するテーマとして与えて考えさせ、まとめて発表する活動です。ワークシートに個人の考えを記入させ、四人程度のグループで話し合い、グルー

プとしての考えをまとめ、学級全体で発表し合います。個人→グループ→学級と話し合いの場を広げることによって、自分とは異なる新たな意見を知って見方・考え方を広め深め、さらに自分の考えを再構築することができるのです。1学年での世界の諸地域学習において、このような言語活動を系統的・計画的に組み入れることによって、学年後半は徐々に活動や見方・考え方の広さ・深さの進展が観られ、2学年での日本の諸地域学習も含め、2年間で大きく成長することが期待できます。



ポイント

「主題の追究学習」では、「大観の学習」成果を生かした言語活動を組み入れて地理的見方・考え方を深めること

(4) 学習のまとめ

教科書p.68のヨーロッパ州の「学習のまとめ」の活用については、このページをそのまま活用し、基礎・基本の定着として家庭での学習 (宿題) とすることができます。

しかし、ステップ②の「ヨーロッパ州のテーマの整理」の表は、(2)「欧州連合 (EU)」を主題とした追究学習において、この表の右の欄に「欧州連合 (EU) の課題」という欄を付加したワークシート (表2) を配布し、欧州連合 (EU) の利点と課題を考え記入させることにより、記述内容や発表内容から思考・判断・表現の評価をするという工夫も考えられます。

その四 世界の諸地域の学習順序における工夫

教科書では、アジア州→ヨーロッパ州→アフリカ州→北アメリカ州→南アメリカ州→オセアニア州の順序になっています。初任者や経験年数が少ない若い先生は、まずは教科書通りの順序で展開し、まさに基礎的、基本的知識・概念・技能を定着させる授業の技を身につけてほしいと思います。しかし10年ぐらいの経験を経ると、同じようリズムでどの州も同じような内容の繰り返しでは物足りなさを感じてくるはずで。そこで、前回のトラの巻①で述べたように、世界の諸地域の指導計画を作成する段階で、基礎的、基本的知識・概

	通常の国境をこえる場合	人や物が自由に国境をこえられる場合（EU統合の利点）	欧州連合（EU）の課題
人の移動	・①が行われたり、お金や時間がかかったりする	・国境をこえて買い物や②をする人や旅行をする人が増える	
物の移動	・輸入品に③がかかる	・輸入品にかかる③をなくしたので、貿易がさかになる	
お金の流れ	・他の国でお金を使う場合、④	・多くの国で⑤という共通のお金が使われるようになる	

表2 『社会科 中学生の地理』 p.68 ステップ②の表②を活用したワークシート

念・技能の獲得・定着を重視する州、地理的見方・考え方を育成する州、思考力・判断力・表現力を育成する言語活動の充実を図る州など、学習内容、学習活動にメリハリをつけた指導計画を作成し、それにもとづいて州の学習順序を考えるのもよいでしょう（学習指導要領では、中項目の学習順序は規定されておられません）。

例えば、自然条件と資源・産業や人々との関連を考えやすいオセアニア州、生徒の興味関心が高く、生徒が多くの情報をすでに得ている北アメリカ州を前半に位置づけます。アジア州は範囲が広く、モンスーンアジアと乾燥アジア、また民族や宗教・文化など多様性を持ち、州を一つの地域にまとめることが難しいことからアジア州を最後に学習することも考えられます。中国・四国地方が山陰・瀬戸内・南四国の3地域に、中部地方が東海・中央高地・北陸の3地域に区分されることを学ぶように、広いアジアが東アジア・東南アジア・南アジア・西アジア・中央アジアに区分されることを学ぶことも地理学習として必要です。あるいは歴史的分野との連動で、古代・中世におけるアジアとの関わりを学習した後で地誌の学習を進めることが、よりアジアの理解を深めるのに効果的と考えられます。このような観点から世界の諸地域の学習順序を次のように考えました（表3）。



ポイント

「世界の諸地域」の学習順序は、生徒の興味関心や実態をふまえ、メリハリのある工夫をすること

表3 【世界の諸地域の指導計画】（私案）
◎追究テーマ

- ①オセアニア州（3時間）
 - ・自然環境と産業の関連
 - ◎多様な民族と多文化社会
- ②北アメリカ州（5時間）
 - ・多様な自然環境と多民族・多文化
 - ◎世界をリードする大規模な産業
- ③南アメリカ州（4時間）
 - ・低地と高地の自然環境と生活
 - ・歴史と文化
 - ◎経済成長と環境問題
- ④ヨーロッパ州（5時間）
 - ・自然環境
 - ・歩みと文化（キリスト教と民族）
 - ・農業と食文化、資源と工業
 - ◎EU統合と課題
- ⑤アフリカ州（3時間）
 - ・多様な自然環境（気候）
 - ・歩みと文化（植民地支配）
 - ◎モノカルチャー経済の問題点と対策
- ⑥アジア州（6時間）
 - ・多様な自然環境と地域区分
 - ・多様な民族と人口分布
 - ・降水量とアジアの農業
 - ・進む工業化と資源
 - ◎日本とアジアの関わり（今と未来）

地誌学習は掘り下げようと思えばいくらかでも深めることができるため、どこまで詳しく教えるべきかを悩まれる先生も多いでしょう。まずは教科書内容を押さえることを基本とし、生徒の興味関心や理解のようす、進度状況に応じてさまざまに試行錯誤してみてください。私の案が参考になれば幸いです。

◎次の3学期号では、日本地誌の授業のポイントについてお話いただきます。